

The social welfare in OSAKA



# 大阪の 社会福祉

2025年3月

838



社会福祉法 大阪市社会福祉協議会

<https://www.osaka-sishakyo.jp>



## さまざまな意見からこれからの活動・まちづくりを考える

令和6年度 西区社会福祉講演会

### こどもたちの笑顔を増やそう



2面  
西区

### 社会福祉講演会「こどもたちの笑顔を増やそう」

▲講演会でコーディネーターを務めた水流添綾さん(後列一番左)、吉田祐一郎さん(後列一番右)と登壇した13人のこどもたち

トボールの国際大会を実施している。その機会に、市内の小中学校に選手たちが分散して行ってくれて、子どもたちと交流イベントを開いている▼言葉も通じないし、初対面であるにもかかわらず、2時間ほどの交流で、初めて車いすに乗り、バスケットボールに取り組む子どもたちがすぐにゲームに夢中になる▼その週末に開かれる大会には子どもたちが手作りの幟幕を広げて応援に来てくれる。こんな素敵な障害者理解、国際交流のプログラムはないと思っていたら、昨年私がこの交流会に参加した小学校は当日体育館に現れなかった▼すぐに校長先生に連絡したら、交通費が出せない子どもがいるので、参加を辞めたとのこと。スポーツは参加することが楽しいし、見ることも楽しい。さらに支える人がいて初めて成り立っている。審判もボール拾いも選手の移動を助ける人も必要なのだ▼パラリンピックのこの競技の日本代表チームの監督もした高橋明氏が、小学生にもわかるパラSPORTSの案内書を作ってくれた。そして、こんな本を書いてくれる人もいて、パラSPORTSは完結するのだ。(石)

HB

大阪市では毎年、世界の強豪国を招いて、車いすバスケットボールの国際大会を実施している。その機会に、市内の小中学校に選手たちが分散して行ってくれて、子どもたちと交流イベントを開いている▼言葉も通じないし、初対面であるにもかかわらず、2時間ほどの交流で、初めて車いすに乗り、バスケットボールに取り組む子どもたちがすぐにゲームに夢中になる▼その週末に開かれる大会には子どもたちが手作りの幟幕を広げて応援に来てくれる。こんな素敵な障害者理解、国際交流のプログラムはないと思っていたら、昨年私がこの交流会に参加した小学校は当日体育館に現れなかった▼すぐに校長先生に連絡したら、交通費が出せない子どもがいるので、参加を辞めたとのこと。スポーツは参加することが楽しいし、見ることも楽しい。さらに支える人がいて初めて成り立っている。審判もボール拾いも選手の移動を助ける人も必要なのだ▼パラリンピックのこの競技の日本代表チームの監督もした高橋明氏が、小学生にもわかるパラSPORTSの案内書を作ってくれた。そして、こんな本を書いてくれる人もいて、パラSPORTSは完結するのだ。(石)

# こども・家庭・地域みんなの笑顔のために



こどもたちの  
笑顔を増やす

西区社協は、2月15日午後1時30分～3時30分に、西区民センターホールで社会福祉講演会「こどもたちの笑顔を増やそう」こどもの「なんでやねん!」を集めてみました」を開催し、約100人の参加がありました。西区には子育て世代が多いことから、子どもの権利について学ぶ場、こどもの意見を聞く場として企画したもので、区内の小中学生も登壇し、こどもの側から感じている「なんでやねん」を発信してもらい、これからのまちづくりを考える機会



▲子どもの権利について吉田先生から講演

となりました。

はじめに、講師として招いた、四天王寺大学准教授の吉田祐一郎さんから、「こどもたちの笑顔を増やそう」と題して、「子どもの権利」に関する、「国連子どもの権利条約」の4つの柱や4つの原則、こどもにやさしいまちとはどのようなまちか等について、〇×クイズも用いながら、理解を深める講演がありました。吉田さんは、「『子どもの権利』を大切にすることは、こどもは弱いから保護する」ということではありません。こどもも大人も同じ仲間であるため、こどもとどのように向き合うのか、また、一人ひとりのこどもの声や生活から、一緒に希望の持てる地域や社会をどのようにつくるかを考える必要があります」と話し、「子どもの権利」について考える時間となりました。



こどもの意見から  
まちづくりを考える

小中学生からの「こどもの発表」では、吉田さんと一般社団法人こもれび代表の水添綾さ

## こどもの発表



▲こどもが普段感じていることを直接発表



▲大人にとっても気づきの場となりました

んの2人がコーディネートし、小中学生の代表として13人が登壇しました。こどもたちからは、普段感じている「なんでやねん」について、なぜ問題と感じているのか、どのような社会や学校を求めているのか等の発表がありました。「宿題がなければいいと思います。調べると宿題がない国があることを知りました。また、宿題を終わらすスピードが遅いので、夜10時頃に終わり、遅い時間に寝ます。宿題がなければ、早寝早起きができ、健康にもいいため、ない方がいいと思います」と「近所の商店街は、昔は大阪のなかでも上位を争う



新たな一歩に向けて  
のキックオフ

最後は、水添綾さんから、「本日は、こどもの意見表明ができる場が少ないなか、こどもたちから思いを聞ける貴重な機会となりました。知らず知らずのうちに、大人の言うことを聞いていたら、上手いくという押しつけや大人が正しいというメッセージを伝えてしまっていないでしょうか。大人が思っている以上にこどもたちは考えています。次の未来を担うの

ぐらい活気があったと聞きました。私は生まれてからずっとこのまちに住んでいます。昔栄えていたとは思えないほど、人通りが少なく、シャッターがおりている店もあります。そこで、商店街の空き店舗を活用して、地域のこどもたちや高齢者を中心に地域の人が集まれる機会をつくれるといいと思います。若い年代と地域を知っている高齢者が意見交換することで、昔のように明るく活発な商店街へ戻ることができると思いますが」等の意見がありました。

は、今のこどもたちです。こどもたちから出たさまざまなアイデアを、こどもと大人が気持ちよく共感し合いながら、一緒にこれからのを考えていくことが大切です」と語りました。

また、吉田さんからは、「こどもたち一人ひとりから、いろいろな意見を聞ける楽しい時間でした。発表したこどもたちにとっては、大人が自分たちの意見を聞いてくれたと嬉しく思っているかと思えます。こどもたちには、意見を言うことの大切さを感じてほしいですし、これからたくさんこどもと大人が関わってほしいと思います」とメッセージを送りました。

## ほかに出ていた こどもの発表(一部)

- 歩きたばこがないまちづくり。私のママは少し前まで妊娠していました。たばこの匂いがするだけで少し気分が悪くなっていました。歩きたばこをやめるだけで楽になる人が増え、西区がすばらしいまちになると思います
- すべての階段がエスカレーターになればいいと思います。メリットは、疲れないし、こどもから高齢者まで自由に使い、ぶつかる危険性もなくなり、安全に行動できます。災害時に電気が止まって動かなくなっても、階段として使用できます。デメリットは、電気代がかかります。巻き込み事故が起こることもあるため、乗り方に充分注意が必要ですが、私はエスカレーターにしてほしいです

見守り活動は  
私とあなたの安心づくりこれまでとこれからの  
見守り活動を考える

住吉区社協は2月10日、住吉区民センター小ホールで、「地域における見守り活動学習会」を開催しました。この学習会は、地域における要援護者の見守りネットワーク強化事業開始から10年が経過するなか、地域の見守り活動者をはじめ、民生委員・児童委員、福祉の専門職、警察、消防、郵便局など見守り活動の協力者等が集まり、より良い活動を展開していく契機となるよう、地域見守り相談室が企画したものです。

私とあなたがつな  
がる見守り活動

はじめに区社協の矢野麻衣子見守り相談室管理者から見守り相談室の具体的な取組み、相談が増えていることなどを報告しました。

次に、「見守り活動は、私とあなたの安心づくり」をテーマに、大阪市ボランティア・市民活動センターの上野谷加代子所長が講演し、「ボランティア活

動は誰が誰とどこで何をするか、私が、あなたがという主語が大切」「話が膨らむ一言、一手間を加える工夫でつながり方が深まる」と見守り活動の大切さなどについて語りました。

上野谷所長は、「生まれてから死ぬまで、社会的・経済的・環境的などのさまざまな要因からたくさんの課題が出てきます。地域コミュニティのあり方も変わってきているなか、問題解決に向けてどのようにプロセスをふんでいくかが重要であり、いろいろな専門職とも連携して、みんなで見守り合うことが大切です」と話しました。

## 実践を共有して、これからの活動に活かす

講演後は、パネルディスカッションをおこない、上野谷所長がコーディネーターを務め、東粉浜、遠里小野、住吉、荻田、墨江の5地域で見守り活動をし



▲講師の  
上野谷所長

ている計7人が登壇し、活動上の悩み、大切に行っていることなどを共有しました。

ディスカッションでは、「2、3日前に見守り訪問して会った方が自宅で亡くなっていたことがありました。これからは、一人暮らしの人が増え、孤独死も増えるかと思っています。SOSを出してもらうためには、どのような声かけが必要か、日頃から考えながら、活動しています」「この活動がこの日にあるよ」だけの声かけだけでなく、「待っているから来てね」までを伝えていきます。1対1では話してくれるが、大勢のなかでは話すことが難しい方もいるので、接し方について悩む時があります」「活動し始めて10年経ちますが、地域で使っている台帳など昔のままを変えられていないものがあり、いろいろと更新が必要ではないかと思っています。また、高齢者だからスマホを使ったコードの読み取りはできないものかと思いついていましたが、スマホ相談会などで操作を学んでいるからか、スムーズにできる人もお

り、活用していきたいと思えます」等の意見がありました。

立場の違いを越えて  
語り合う場を

各地域の活動者からの発表を受けて、上野谷所長は、「どの地域の方々もかなり高度な活動をされていて頭が下がる」と労ったうえで、「どのような声かけや接し方が必要か」という悩みが出ていましたが、相手の気持ちに寄り添い、こちらも心を開いて自分からアプローチし、待つということも大切です。急かさないうことで心を開い



▲パネルディスカッションで登壇した方々（前列左から水口敬子さん、上野谷加代子所長、山野一子さん。後列左から2番目から山田和成さん、庄見伊津子さん、奥埜皓子さん、池村康子さん、吉田久美子さん）と区社協職員 後列一番右の松尾事務局長と後列一番左の井西地域支援担当係長

る仕組みとして、地域見守り支援システムの構築が進められ10年が経過しています。今回は上野谷先生にいろいろと示唆をいただきながら、地域の活動者を中心に、さまざまな方々と見守り活動のこれまでとこれからを考える機会となりました。また、学習会で感じ取れた活動へのヒントから、地域の方々、専門職や関係者、行政や社協と一緒に歩む契機となりました」と話しました。

学習会を終えて、  
見守り活動の  
新たな契機に

講演会終了後、矢野管理者は、「住吉区では災害時も含めて、地域での見守り活動を支える仕組みとして、地域見守り支援システムの構築が進められ10年が経過しています。今回は上野谷先生にいろいろと示唆をいただきながら、地域の活動者を中心に、さまざまな方々と見守り活動のこれまでとこれからを考える機会となりました。また、学習会で感じ取れた活動へのヒントから、地域の方々、専門職や関係者、行政や社協と一緒に歩む契機となりました」と話しました。

## 地域こども支援ネットワーク事業シンポジウム

## 体験の格差が与えるこどもたちへの影響について考える

## 体験や経験の重要性

大阪市ボランティア・市民活動センター（市社協）は、2月8日に、たかつガーデンで、地域こども支援ネットワーク事業シンポジウム「体験の格差が与えるこどもたちへの影響について考える」を開催しました。本シンポジウムは、体験や経験を通じて、こどもたちが社会を生き抜く力、豊かな人間性を育むために私たちに何ができるのか地域全体で一緒に考えることを目的とし、100人が参加しました。



▲講師の徳田さん

## 体験活動を届けるために

第1部では、基調講演として講師に大阪体育大学スポーツ科学部講師の徳田真彦先生を

迎え、さまざまな調査結果をもとに、家庭の年収が低くなるに伴い、学校外の体験活動をしていないこどもが増えるという、「体験の貧困」状況や、こども期の貧困は、こどもが成長した後も影響を及ぼしていることなどについて解説がありました。また、徳田先生は、「学校の自然体験活動をおこなっていない理由として、参加費・交通費等が高く経済的理由で難しい、情報不足、道具を持っていないなどの障壁があります。多くの人へ情報を届けるために地域コミュニティと連携していく必要がある、地域での活動を推進・調整していく『コーディネート』や『指導者』の発掘・養成が重要です。加えて、対象に合わせた多様な自然体験プログラムの機会創出も必要です」と話しました。

## こどもたちと一緒に活動を創出

第2部では、「体験」をテーマとしたパネルディスカッションをおこないました。コーディネーターは、桃山学院大学名誉

教授の石田易司先生が務め、こども班会「コペルくん」（鶴見区）の西峯圭子さん、公益財団法人住吉隣保事業推進協会（住吉区）の藤本真帆さん、NPO法人Unity（天王寺区）の目崎敦也さんの3人がパネリストとして登壇しました。また、アドバイザーとして徳田先生も引き続き登壇しました。



▲西峯さん

こども班会「コペルくん」は、毎月最終土曜日にコープおおさか病院健診センターで活動しており、食育や音楽を届けるプロジェクト、ワークショップ、芋掘り体験などを実施しています。西峯さんは、「こどもが興味を持つ活動を提供し、こどもの生活が楽しくなるよう活動しています。地域の方を中心に講師をお願いし、交流を通して、参加した親子とスタッフ、講師を含めた地域のボランティアとの関わりが強くなり、それぞれにとっての癒しの場となっています」と話しました。



▲藤本さん

続いて、住吉隣保事業推進協会では、こども食堂や学習の場、居場所づくりなどを実施しています。こどもたちの知りたい・やってみたいの声を大切に、ほぼ無人島へ行って魚をさばく体験や、多文化交流等のさまざまな機会を設けています。藤本さんは、「こども会議を実施し、こどもたちに次何をしたいか、料理では何をつくりたいかを話し合っています。出意見を基本はできるようにしています。ですが、できないことであれば、どうすればできるかをひたすら一緒に考えて、体験できるようにしています。活動を継続していくには、やはりつながりも大切なので、さまざまな団体、企業等の人とつながれるようにもしています」と語りました。



▲目崎さん

最後に、NPO法人Unityの目崎さんからは、「団体立上げのきっかけとして、大学3年生の時に、こどもとの関わり

なかで『お金がないから塾行へんねん』『うち貧乏やし、夢とか目標とかないわ』などのこどもたちの声を聞き、悔しさを覚えてことから、現在の活動につながっています。学習支援を通して居場所を提供し、こどもの明るい未来を作っていける、そのような居場所づくりに挑戦しています。また、多くの団体と協働して、科学体験などのイベントも実施しています。本質が疎かにならないように、仲間やこどもたちと最前線と一緒に活動するようにしています」と述べました。

基調講演やパネルディスカッション、参加者からの質問も通して、こどもの体験活動の大切さを認識するとともに、こどもの居場所の運営とこれからの居場所活動について考える機会となりました。



▲パネルディスカッションで各団体の思いや今後の展開を共有

# 防災イベント

## SONAERUPARK

楽しく学び、  
防災を再確認

1月11日午後1時～4時に、住之江区のGORILLA HALL OSAKA（グリラホールオオサカ）で、災害を楽しく学ぶ「SONAERUPARK」が開催されました。

この取組みは、SONAERUPROJECT実行委員会が主催となり、住之江区社協も協力し、老若男女問わず楽しく災害を学ぶことができるイベントとして企画されたものです。

会場内では、区社協による災害ボランティアセンターのパネル展示、セラピードッグ体験、



▲さまざまなブースを設け、楽しく防災を学びました



▲区社協展示ブースで、災害時の社協の役割を啓発

もしもに備えて、  
何が必要か

また、ステージ企画として、気象予報士・防災士の蓬菜大介さんによる講演と、「能登半島地震の現場経験から災害時の役割と重要性」と題して、区社協職員も登壇するトークライブがありました。

トークライブでは、被災地支援経験のある区社協の山田直宏見守り相談室管理者と西田樹地域支援担当主事、災害支援団体「四番隊」代表理事の伊藤純さんから、災害ボランティアセンターの役割や被災地支援の取

組み、経験を通して必要だと思う防災について話がありました。

西田主事は、災害ボランティアセンターについて説明した後、「今回の令和6年能登半島地震で、近畿ブロックの社協職員とともに第17クール（令和6年3月28日～4月3日）として、七尾市災害ボランティアセンターへ派遣されました。想定していた以上にボランティアの方々が、災害ボランティアセンターの役割を把握されており、認知されていることを実感しました。一方で災害ボランティアセンター運営に関わってくれる地元住民が少なかったことに課題を感じました」と話しました。

伊藤さんは、「各家庭での備蓄において、モバイルバッテリー一つでは、やはり足りません。ポータブルバッテリーぐらいが必要だと思う一方、備蓄品は個人的には3日分までは必要ないと思っています。特にTVで報道されている避難所は物資が多く届く傾向にあるため、そこに避難することも一つの方法です。異なる意見もあるかもしれませんが、自分に合った備蓄をすることが大切であり、各々の状況をふまえ、自分で考えて備蓄し、防災につなげてほしいです」と話しました。

続けて伊藤さんは、「被災地

に向けて物資で支援する際には、支援先の状況、避難している人の層を把握する必要があります。今回の令和6年能登半島地震で、赤ちゃん用のオムツや生理用品等が必要かと思って届けに行きましたが、高齢者が多く避難しており、入れ歯の洗浄剤や介護用品等の方が必要でした。この経験から、現地の状況を知ることの大切さに気づきました。また、支援してもらえように助けると言える受援力も大事だと感じました」と語りました。

山田管理者は、伊藤さんから話を受けて、「受援力は平時も災害時も大切と私も感じています。自ら助けを求めることが苦手な方は多くおり、他の人に比べて私は大丈夫などと言われることは普段の業務のなかでもよくあることです。ただ一人ではできないことは多く、助けてと普段から言い合える関係をつくるのが重要だと活動しながら実感する毎日です」と語りました。

備えを  
強化するために

トークライブをふりかえって、山田管理者は、「平時から地域住民、関係機関、NPO、企業などの団体と連携し、災害時には助け合える関係をつくれ

るよう、取り組んでいきたいです。社協は、実災害に即し、災害ボランティアセンターの開設とともに、災害という特殊な環境のなかで業務遂行していく必要があります。2年前に区社協内に防災プロジェクトチームを立ち上げ、研修もおこなっています。災害時に適正な対応ができるよう組織力を強化していきます」と話しました。

西田主事は、「まだまだ災害について勉強不足な点が多いため、災害に『備える』ことを改めて考えていきたいです。さまざまな情報をキャッチしていくためにも、多種多様な団体と関わりをつくっていきたいです。また、災害ボランティアセンターや社協の役割を多くの人に知ってもらえるよう発信していきたいです」とふりかえりました。



▲トークライブでいつかに備える重要性を啓発（左から西田主事、伊藤さん、山田管理者）

# 社会福祉施設の公益的な取組みの推進

## 一連携・協働による場づくり・つながりづくり

大阪市社会事業施設協議会（事務局・市社協）では、6団体（児童・保育・高齢・生活保護・地域・障害）の各施設を対象に、(かつて毎月第二水曜日に開催していたことから)「一水会」という学習会を、毎年開催してきました。

近年は、大阪市社会事業施設

協議会と市社協による共催で、各区社会福祉施設連絡会（事務局・各区社協）との「合同学習会」としており、今年度は2月7日に会場参集とオンラインの併用で開催し、施設役職員、社協職員ら約170人が参加しました。

今回は、連携・協働による場づくり・つながりづくりをテーマとして、講演と、大

正区における施設と地域、社協が連携した居場所づくり、阿倍野区社会福祉施設連絡会（以下、阿倍野区施設連）として取り組んでいる社会貢献活動の2つの実践報告がおこなわれました。

### 四方よしの地域活動に向けて

最初に、講師の「福祉と教育の実践研究所 SOLA」主宰の新崎国広先生は、「社会福祉施設の公益的な取組みは、利用者・施設・地域住民・ボランティア

それぞれにメリットがある『四方よし』の活動です。地域のなかにある社会福祉施設として、施設が積極的に、地域住民へ施設機能を開放することで、多様な地域住民とつながり、居場所づくりもできるといふこと、施設から地域に目を向ける意識を施設職員がもてるようにしていくことが重要です」と話しました。

### 多職種連携を 見据えた プロデュース力

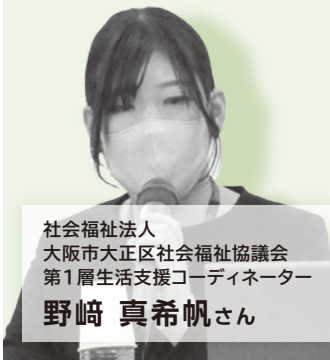
講義に続き、2つの実践報告があり、新崎先生は「大正区のビーナス福祉会の取組みでは、施設が地域のなかでつながり、地域住民といふものをつくりあげていくことに取り組まれており、阿倍野区施設連の取組みは、区内施設が助け上手、助けられ上手になれるような仕組みづくりの実践報告でした。両実践の共通点は『多職種連携』であり、施設と地域や社協などが協働し、丁寧に取り組まれる様子が伺えました。また、2つの実践

## 実践報告①

### 大正区 施設における地域の居場所づくり

きっかけとなったのは、特別養護老人ホーム ビーナズホーム千島園がある泉尾東地域の地域支援会議でした。取組みを企画するなかで、区社協が過去に実施したアンケートにおいて、「歌・カラオケ」に興味があるという回答が多くあったことや、田村さんから施設の活用及び通信カラオケを使用できると聞き、カラオケをツールとした居場所をともに検討しました。実施にあたって、地域と施設の思いを共有できる機会をつくり、施設での活動の立上げが実現しました。今後も地域の声を施設と共有し、取り組んでいきたいと思えます。

当法人が運営する特別養護老人ホーム ビーナズホーム千島園がある泉尾東地域は高齢化率が高く、地域会館と施設の間には大きなショッピングモールがあります。大正区では小地域単位で地域支援会議がおこなわれており、施設として参画しています。会議のなかで、会館までの距離が遠く、地域の活動に通えない高齢者が多いとの声を聞き、施設としてできることはないかと職員と話し合いの場を設け、どのような取組みができるかを考えたところ、施設の空きスペースを活用したカラオケを始めました。施設として、地域と協働することに意味があると感じています。



社会福祉法人 大阪市大正区社会福祉協議会 第1層生活支援コーディネーター 野崎 真希帆さん



▲カラオケを楽しまれる地域住民と利用者の皆さん

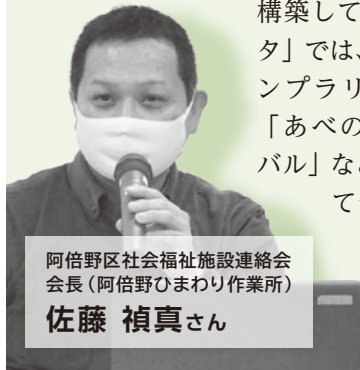


社会福祉法人ビーナス福祉会 業務執行理事 田村 善紀さん

## 阿倍野区 阿倍野区社会福祉施設連絡会の取組み

阿倍野区施設連は、障がい児者、高齢者、児童の3部会に分かれ、各々で研修等を企画しています。施設連としても研修開催のほか、「施設の地域化」をテーマに「あべのつながりフェスタ」の実施や「施設資源情報ファイル」「阿倍野区福祉教育プログラム集」を作成する等、地域とつながりをもてるよう活動しています。「施設資源情報ファイル」は、施設の貸出可能な備品を掲載し、地域住民や他施設が貸し借りできるような仕組みを構築しています。「あべのつながりフェスタ」では、施設を知ってもらえるよう、スタン

プラリー形式の「あべの福祉施設バル」などを実施してきました。

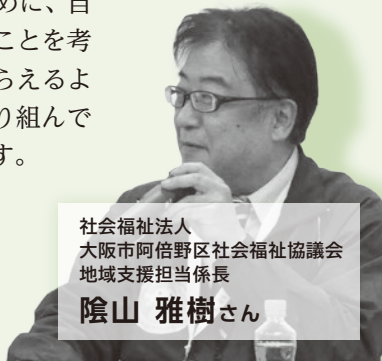


阿倍野区社会福祉施設連絡会  
会長（阿倍野ひまわり作業所）  
佐藤 禎真さん



▲中学校での福祉教育の様子

阿倍野区社協は施設連の事務局として、ともに取組みを推進してきました。福祉教育プログラム集は、障がい児者部会を中心に、障がいを抱えるこどもの悩み、いじめの解消に向け、違いがあっても認めあえる心を育めるようにという思いで作成したものです。今後プログラム集の改訂も予定しており、誰もが安心して暮らせる地域にするために、自分たちにできることを考えてもらえるように取り組んでいきます。



社会福祉法人  
大阪市阿倍野区社会福祉協議会  
地域支援担当係長  
陰山 雅樹さん

### 参加者 アンケートから



- 当施設での強みを正しく把握し、地域貢献できるカタチにしていくことを前向きに検討していきたい（生活保護施設職員）
- 学校・施設・地域とのつながる場づくりを再度検討し、住民の力・地域活動の力を合わせて、一緒にすすめていきたいと思いました（社協職員）

報告の根幹には、何をすべきかという情熱とするべきことはなにかという『パッション』や『ミッション』があり、地域の強みを活かした『ビジョン』を立て、他者へと共有し、多様な主体との連携・協働による『アクション』へとつながります」と話しました。

続けて、新崎先生は、「社会貢献によって、施設の地域化、社会化を広げてほしいです」と締めくくりました。

高額療養費制度とは、同一月内（1日から月末まで）に医療機関や薬局の窓口で支払う医療費の自己負担額が一定の金額（自己負担限度額）を超えた場合に、その超過金額を支給する制度である。自己負担限度額は、年齢や所得に応じて定められており、例えば70歳未満の平均年収にあたる「約370万円、約770万円」の区分では約80万円、100万円に設定されている。

厚生労働省は2024年12月、高齢化や高額薬剤の普及等によって増大する医療費に対し、医療保険の保険料増加を抑制するため、2025年8月から段階的に自己負担限度額を引き上げること等を決定した。これにより、2027年8月以降は70歳未満の「約510万円、約650万円」の区分で約113万円、400万円、「約650万円、約770万円」の区分で約138万円、600万円に引き上げられる予定であり、現行制度と比較して自己負担が著しく増大する見込みである。

## 風をよむ

### 高額療養費制度改正による 自己負担の引き上げ

大阪公立大学大学院生活科学研究科 講師 杉山 京

の世代の被保険者の保険料負担の軽減を図ることを目的に、保険料負担が年間1,100万円、5,000円軽減される見込みであるが、健康な人にとってはあまり実感がないかもしれない。しかし自己負担の引き上げは、特に長期に治療を有する患者を確実に苦しめ、治療の選択肢を狭める、さらには必要な医療サービスの利用を控えることにつながる危険性が懸念される。健康な状態にある人も、いつかは高額療養費制度の対象となり得る存在であるため、本問題には無関心でいられない。

そもそも高額療養費制度は、医療費の家計逼迫を軽減し、すべての人が安心して医療を受けられる環境整備を目的とした制度である。そのため、マクロ的な自己負担の引き上げの可否を議論だけでなく、本来の制度趣旨に則り、一人ひとりの患者に対して必要な医療サービスの提供を妨げることがないよう、ミクロな視点での制度のあり方を検討すべきである。

## 大阪府共同募金会からのお知らせ ▶ 令和6年度共同募金のお礼と報告

令和6年度(第78回)共同募金運動に、府民の皆様の温かいご理解ご協力ならびに関係団体等の並々ならぬご尽力をいただき、ありがとうございます。おかげをもちまして、12月末までの募金実績額は、別表のとおりとなりました。(1~3月の期間も一部の地域でテーマ型募金運動を実施中)

お寄せいただきましたご寄付は、配分委員会、理事会等で慎重に審議の上、民間社会福祉事業の推進や、地域に根ざしたさまざまな福祉活動の支援等、障害のある人、高齢者、子どもたちなどのために役立ててまいります。

皆様に厚くお礼申し上げますと共に、今後とも共同募金運動の発展に、一層のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

社会福祉法人  
大阪府共同募金会



令和6年度大阪府共同募金実績額表

令和6年12月31日現在

区分	6年度実績額(円)	構成比(%)	5年度実績額(円)	比較増減(△)(円)	増減率(%)
戸別募金	258,870,009	64.3	282,005,228	△ 23,135,219	△ 8.2
法人募金	72,604,071	18.1	50,072,005	22,532,066	45.0
学校募金	9,338,820	2.3	9,012,495	326,325	3.6
職域募金	4,839,675	1.2	5,497,365	△ 657,690	△ 12.0
街頭募金	18,079,403	4.5	17,418,640	660,763	3.8
パッチ募金	33,441,500	8.3	35,700,000	△ 2,258,500	△ 6.3
その他の	5,213,590	1.3	4,878,528	335,062	6.9
合計	402,387,068	100	404,584,261	△ 2,197,193	△ 0.5
目標額	530,000,000	-	560,000,000	△ 30,000,000	-
達成率	75.9%	-	72.2%	-	-

地区別実績額表

地区名	実績額(円)	地区名	実績額(円)	地区名	実績額(円)
北	8,009,705	堺	35,856,308	藤井寺	2,973,116
都島	3,670,891	岸和田	8,863,384	東大阪	25,104,386
福島	3,881,002	豊中	10,308,349	泉南市	2,973,418
此花	3,677,279	池田	2,124,883	四條畷	3,202,466
中	6,583,118	吹田	9,418,877	交野	3,438,706
西	2,498,692	泉大津	2,815,495	大阪狭山	2,549,257
港	5,307,023	高槻	7,918,393	阪南	2,632,782
大正	3,655,317	貝塚	6,238,080	大阪市を除く各市計	206,251,264
天王寺	3,200,992	守口	3,341,212	島本	1,112,158
浪速	2,716,719	枚方	6,498,841	豊能	853,343
西淀川	3,549,952	茨木	7,606,589	能勢	1,498,648
淀川	8,053,983	八尾	8,233,685	忠岡	1,690,004
東淀川	8,768,557	泉佐野	2,518,598	熊取	2,753,931
東生	6,376,228	富田	2,895,880	田尻	533,598
旭	7,573,603	豊屋川	11,873,023	岬	2,492,442
城東	7,396,455	河内長野	4,069,289	太子	916,981
鶴見	12,342,594	松原	2,528,937	河内	1,602,005
阿倍野	7,284,077	大東	5,126,555	千早赤阪	743,415
住吉	5,662,195	和泉	5,864,173	町村計	14,196,525
中之	3,805,528	箕面	3,233,652		
住吉	8,522,837	柏原	4,829,076	大阪市計	136,346,137
東住吉	4,314,237	羽曳野	3,377,809	大阪市を除く各市計	206,251,264
平野	5,835,773	門真	3,246,322	町村計	14,196,525
西成	3,659,380	摂津	2,429,042	本部	45,593,142
大阪市計	136,346,137	高石	2,160,681	合計	402,387,068

## 「大阪の社会福祉」が5月号から全面カラーになります(奇数月発行)

### 「大阪の社会福祉」読者のみなさま

いつも本誌をご愛読いただきまして、誠にありがとうございます。

大阪の社会福祉は、昭和25年に創刊以来、月刊誌として定期発行しており、市民や社会福祉関係者など幅広い読者をターゲットに、福祉に関するさまざまな情報、各区・地域における地域福祉推進の身近な取組みなど、「福祉」を身近に感じていただけるような内容をタイムリーにお伝えしています。

この度、取材対象活動団体の活動の様子などがより伝わるよう、効果的に発信することを目的として、令和7年度からは全面カラーとします。また、5月号(839号)から発行頻度を2か月に1回(奇数月)発行とし、現在の8頁(8月と1月は12頁)から12頁に変更します。

引き続き、ご愛読いただきますよう、よろしくお願いたします。

変更前

刷色	2色刷り
発行頻度	毎月(年12回)
頁数	8頁(8月と1月は12頁)

変更後

刷色	4色刷り(全面カラー)
発行頻度	2か月に1回(奇数月の年6回)
頁数	12頁

### 大阪の社会福祉に名刺広告を掲載してみませんか?

本誌に掲載する名刺広告について、新春名刺広告(1月号に掲載)のほか、随時受け付けています。月1回28,000部を発行し、地域活動者、社会福祉に関心のある方を中心に配付しています。

掲載希望月の2か月前まで、お問合せください。

主な配置・配付場所は、各区社会福祉協議会、各区老人福祉センター、各区子ども・子育てプラザ、大阪役所、各区役所、各区図書館、各区民センター、地域の会館、市内の市立小中学校などです。

詳細はこちらから

<https://www.osaka-sishakyo.jp/advertisement/>

問合せ先 大阪市社会福祉協議会 地域福祉課

TEL:06-6765-5606



立ちどまらない保険。  
MS&AD 三井住友海上

三井住友海上の安心

**GK**

火災保険 地震保険 がん保険

www.ms-ins.com